



2015年(平成27年)
8月号(No. 843)

公益社団法人
日本山岳会
The Japanese Alpine Club

定価1部 150円

会員の会報購読料は年会費に含まれています

URL ● <http://www.jac.or.jp>
e-mail ● jac-room@jac.or.jp

山のグレーディングと安全登山

近年の山岳遭難の増加は、「登りたい山」と「登れる山」とのミスマッチが主要因となっている。長野県を中心に新潟、山梨、静岡の4県が、これらに対応すべく「山のグレーディング」を発表した。

はじめに

山岳遭難の防止対策に関わって5年目となる。この間、長野県警察山岳遭難救助隊や各地区山岳遭難防止対策協会の方々からご助言をいただきながら、この20年で3倍に増加した遭難件数を1件でも減らす方策を検討し、実施してきた。

心がけてきたことが1つある。それは実際の登山者の状況がどうなっているのか「現場」からの知見を大切にすることだ。現在このように増えてしまった遭難の主要

原 一 樹

因は2つあると考えている。1つは中高年登山者を中心に今の自分の「登山力量」に応じない登山ルートを選択していること、2つに登山は生命の危険を伴う行為であり、そのための準備をした者がチャレンジするスポーツである、という認識が初心者には乏しいということである。

前者への対応が「山のグレーディング」作成の目的であり、資料1で中高年遭難の「激増」ぶりをご覧いただきたいが、後者について簡単に触れておきたい。

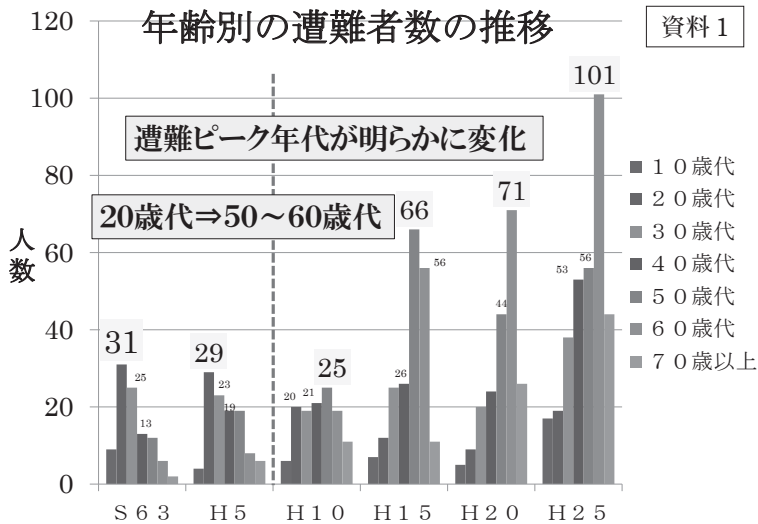
目 次

山のグレーディングと安全登山	1
平成27・28年度役員紹介	5
平成27年度支部事業補助の報告	9
ネパール救援募金を贈呈	12
図書受入報告	12
[山の日に向けて]山を考える③	13
東西南北	14
創立110周年記念事業	15
日本三百名山登山シリーズ⑤	15
活動報告	16
集会委員会	
支部だより	17
越後支部	
図書紹介	18
新入会員	18
会務報告	19
ルーム日誌	21
会員異動	21
INFORMATION	22
編集後記	23

▶ 日本山岳会事務局(含図書室)取扱時間
月・火・木……………10～20時
水・金……………13～20時
第2、第4土曜日……………閉室
第1、第3、第5土曜日……………10～18時

年齢別の遭難者数の推移

資料1



の1週間くらい前から体調管理に気を付け、山とは何があってもおかしくない所、という認識が染みについている。

だが、今の初心者にはそのような認識は乏しい。なぜこのようになってしまったのだろうか。登山関係団体や登山をビジネスとする業界が「登山には生命のリスクが伴う」ということを十分に伝えてこなかったのではないか……、そして伝えきれなかった責任の一端は私たちにもある。

山のグレーディングのきっかけ

横尾山荘の前で情報提供活動を始めた平成25年夏のある日、この地域の県警山岳遭難救助隊の責任者が1枚のプリントを示してこう言った。「原さん、こういうものが日本人にも必要な時代になったんだよ」と。

それは「自然公園財団」が外国人向けに上高地で配布している「登山情報チラシ」だった。槍ヶ岳、穂

高岳といつても、初めて聞く外国人にとつてはどの程度に厳しい山かピンとこないだろう。それらへの配慮からこのプリントには山域にある山々の難しさを、「標高と

所要時間による難易度」としてⅠ～Ⅲの3ランクに、また、「技術的な難易度」としてⅠ～Ⅳの4ランクに分けて評価してあった。これによると奥穂高岳はⅢ3、槍ヶ岳

はⅢ4ということになっていた。ほとんどの登山者が職場や学園、そして地域の山岳会に所属していた時代は、登ろうとする山と登山者の力量とのミスマッチは山岳会でチェックされていたと思われる。

しかし、平成6年ごろから始まった「中高年の登山ブーム」以降、様相は大きく変化し、多くの登山者は直接的なアドバイスを得る機会が少なくなり、「登れる山より登りたい山」を選択するケースが多くなったと想像できる。

力量をオーバーする山を選んだ結果、なんらかのアクシデントが発生した場合、リカバリーすることができず、救助を求めざるを得ないケースが増加していると考えられる。

また、最近の調査では、中高年者はベテランと言われる人ほど遭難が多いという結果もある。かつての自身の登山経歴を絶対視し、今の自分と山とのミスマッチが進んでいるのではないだろうか。

まさに「過去の体力、過去のもの」なのである。

グレーディング化に向け「ルート定数」の出会い

初心者や体力の衰えた中高年登山者向けに、分かりやすい山選びの指標を作ろうとしたのは平成25年秋のことだ。

前述の外国人向けの指標の例のように、体力的な側面と技術的な側面からアプローチするのが良いことは容易に想像できた。

このうち体力的な側面からの評価については「長野県山岳総合センター」の杉田所長から耳寄りな情報が寄せられた。登山ルートを体力面から評価できそうな「ルート定数」というものを鹿屋体育大学の山本正嘉教授が研究成果として発表しており、これを使わせてもらえれば、誰がやっても同じ体力的な評価ができそうだ……。

以後、「山のグレーディング」は杉田所長に主導され、開発されていくことになる。

山本教授の「ルート定数」は資料2のような「計算式」で表され、これに登山者の体重とザックなどの重量を足したものを掛ければ、こ

資料2

$$\begin{aligned} & \text{登山中のエネルギー消費量 (Kcal)} \\ &= \left[1.8 \times \text{行動時間} + \left(0.3 \times \text{歩行距離} + 10.0 \times \text{上り累計標高差} + 0.6 \times \text{下り累計標高差} \right) \right] \times (\text{体重} + \text{ザック重量}) \end{aligned}$$

のコースを登山するのに必要な消費カロリーが計算できるというものである。

山本教授の了解を得、杉田所長は一般的に利用されている登山地図と「カシミール」を使って計算に必要なルートごとの4つの要素を求め、主要な登山ルートの「ルート定数」を計算した。

これを10で割って小数点以下を繰り上げ、「体力度」として表現することを考えた。例えば槍沢ルートを往復する槍ヶ岳は70・3となり、「体力度」は8となる。「ルート

技術的難易度の定義

資料 3

	登 山 道	登山者に求められる技術・能力
A ★	◇概ね整備済 ◇転んだ場合でも転落・滑落の可能性は低い。 ◇道迷いの心配は少ない。	◇登山の装備が必要
B ★ ★	◇沢、崖、場所により雪渓などを通過 ◇急な登下降がある。 ◇道が分かりにくい所がある。 ◇転んだ場合の転落・滑落事故につながる場所がある。	◇登山経験が必要 ◇ 地図読み能力 があることが望ましい。
C ★ ★ ★	◇ハシゴ・くさり場、また、場所により雪渓や渡渉箇所がある。 ◇ミスをすると転落・滑落などの事故となる場所がある。 ◇案内標識が不十分な箇所も含まれる。	◇ 地図読み能力 、ハシゴ・くさり場などを通過できる身体能力が必要
D ★ ★ ★ ★	◇厳しい岩稜や不安定なガレ場、ハシゴ・くさり場、 藪漕ぎ を必要とする箇所、場所により雪渓や渡渉箇所がある。 ◇手を使う急な登下降がある。 ◇ハシゴ・くさり場や案内標識などの人工的な補助は限定的で、転落・滑落の危険箇所が多い。	◇ 地図読み能力 、岩場、雪渓を安定して通過できるバランス能力や技術が必要 ◇ ルートファインディング の技術が必要
E ★ ★ ★ ★ ★	◇緊張を強いられる厳しい岩稜の登下降が続き、転落・滑落の危険箇所が連続する。 ◇深い 藪漕ぎ を必要とする箇所が連続する場合がある。	◇ 地図読み能力 、岩場、雪渓を安定して通過できるバランス能力や技術が必要 ◇ ルートファインディング の技術、高度な判断力が必要 ◇登山者によってはロープを使わないと危険な場所もある。

(用語説明)

地図読み能力 : 地図を見て自分の位置を知ることができ、目的地へのルートを識別できる能力

ルートファインディング : 登山道がついていないところ、または分かりづらいところで、一番安全に通過できるコースを見つけること

藪漕ぎ : 笹や低木などが密生する藪を手でかき分けながら進むこと

「定数」が90を超えるものはすべて10とすることとした。

代表的な登山ルートの「体力度」を県内の山に詳しい方々に示したところ、実感とほぼ一致することであり、自信を深めた。

技術的難易度の定義

次の課題は技術的な側面の評価だ。これについても体力度と同様、「誰がやっても同じようになる」定義付けに取り掛かった。

県内の山岳関係者や遭難救助に長く関わった方々から難易度を決める際に必要な「キーワード」を教えていただき、登山道の状況とそれに対処するために必要な登山者の技術・能力の記述に取り組み、A～Eまでの5段階評価とした。

実際の評価は当該ルートがある「地区山岳遭難防止対策協会」に依頼して、ルート上で一番厳しい部分の評価をもらった。「技術的難易度」の定義を資料3に示すが、これは今年5月に新潟県、山梨県および静岡県も一緒になり「山のグレーディング」に取り組むことになった際、長野県では全体の1割程度の「道迷い遭難」の危険要素についても加えるよう要望が

あり、これを反映したものである。

山のグレーディングの今後

私たちは今の「山のグレーディング」を完成形とは考えていない。海外の登山地図を見ると3～4ランクに登山道の技術的難易度を評価し、ひと目で分かるよう凡例で示してある。

一方、日本の登山地図はどうだろうか。実線は登山道で、点線は「難路」としている。2種類だけだ。これではこれほど登山が「大衆化」した時代にふさわしいとは言えないと思う。

例えば上高地から瀬沢経由の北穂ピストンの評価はDだ。一番厳しい南稜の登山道をD評価としたものだが、全行程にはAもBもCもある。これを登山地図上に反映させれば登山者の心構えも違ってくる。今の登山地図の実線を5段階に分けるのである。

現在、長野県では各地の「信州登山案内人組合」に委託し、「山のグレーディング」で評価した102ルートのコースタイムのピッチごとにA～Eの評価付けを実施している。秋までには評価を終わらせ、成果を県内の市町村や全国の登山地

図を取り扱っている事業者を提供し、登山地図への反映を依頼することとしている。

最後に(気象遭難に関して)

この間、多くの登山者の方々と登山口や様々な登山イベントで接するなかで、山岳遭難に関して大きな誤解があることに気が付いたので、このことを最後に記しておきたい。

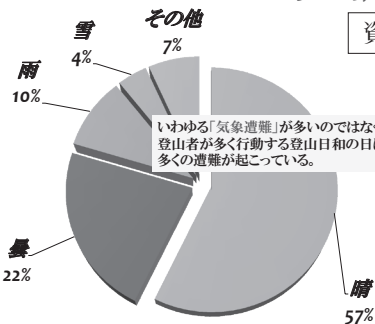
皆さんは遭難の発生したその日の天候は晴れが多いのか、雨や雪のような「悪天候」が多いのか、どう思っているだろうか。

「気象遭難」という言葉がある。マスコミでクローズアップされる遭難は、平成21年のトムラウシ山や平成25年の中央アルプスの韓国人パーティの大量遭難など、悪天候にもかかわらず無理して「突っ込んだ」ものが報道されることが多い。

登山者との対話でもイベントでのアンケート調査でも「気象遭難」が遭難の多くを占めている、と「勘違い」している。

長野県の平成23年から25年の3年間では晴れの日の遭難が57%、曇りが22%で、いわゆる「気象遭

遭難の日のお天気(長野県H23～H25)



難」にあたる雨や雪の日の遭難は合わせても14%に過ぎない。

この事実を伝えると、一定の登山者は「じゃあ、朝は晴れてて、その後から雨になったんだ」とおっしゃる。マスコミからの擦り込みとはつくづく恐ろしいものだ。

山岳遭難とは誰にでも起こり得るものであり、その要因は今の自分の「登山力量」に合っていない山選びをしていることにある、というのを改めて強調し、安全登山を心がけていただけるようお願いしたい。

(長野県観光部山岳高原観光課)

平成27・28年度役員紹介

先ごろの総会を経て着任された役員の方々に自己紹介をしていただきます。①会員番号 ②役職 ③担当委員会やPT、WGなど ④好きな山域や登山スタイルなど

吉川正幸(よしかわ・まさゆき)

①7345

②副会長

③財務委員会、高尾の森づくりの会など

④現在の興味は、インドネシアとブータンの未知の山群です。また、学生時代に登ったコーカサスの山々にも再訪したいと思っています。

学生時代の山岳部監督は田辺壽先輩。当時は巨峰のようだった横有恒、三田幸夫元会長にもお目にかかる機会がありました。先輩方のような立派な大人になれると思って日本山岳会に入会しました。その後四十数年、仕事にかまけて山にも遠ざかり、望んだ結果は出なかったようです。

「元気に山に登りましょう」と皆さんに呼びかけているのですが、当会の運営を手伝うようになってからは、山積した問題のために自身は山から遠のくばかりです。登

山は誰でも楽しめるスポーツです。その源泉は日本山岳会であるべきと思います。しかし、大転換を行わなければ会の存続は難しい状況です。110年前の創立者たちの、山に向けるキラキラと輝く瞳の情熱を忘れず、会務に専念し、山に向かおうと思います。

大久保春美(おおくぼ・はるみ)

①7249

②副会長

③支部事業委員会、「山の日」事業委員会、家族登山普及委員会、科学委員会、医療委員会、集会委員会、再生委員会、秩父宮記念山岳賞審査委員会

20歳代から30歳代前半にかけて集会委員会や婦人懇談会の活動を通して先輩諸氏から多くのことを学びました。女性の先輩たちは頼もしく、「人づくり」や「人が繋がる」ことを大切にした山岳会の風土がありました。育てていただいた

感謝の気持ちは変わらず、今度は私が引き継ぐときが来たと思っています。特に、女性会員の各委員会への参画を推進すること、若い女性会員の増加が当面の目標です。

副会長として担当する業務が多く、会の運営を停滞させないようにと緊張の連続ですが、皆さんからのご指導をいただきながら、できるだけ早く現状を把握するとともに、未来の日本山岳会のあり方も考えながら取り組んでいきたいと思っています。楽しみにしていた定年後の山登り三昧の日々が遠のいていますが、現在の自分の体力を客観的に見つめながら、山を楽しむと思う今日このごろです。

山田和人(やまだ・かずひと)

①9909

②副会長

③YOUTH CLUB、自然保護委員会、再生委員会、会員システムWG

大阪出身、大学を京都で過ごした関西人です。高校のWV部で槍沢雪溪を登り、こんな世界があったのかと感動したのが山にのめり込むきっかけでした。大学山岳部

では遭難事故を起こし、先輩を失いました。彼らの分も登らねば、というのが登山継続の動機です。

これまでYOUTH CLUB、特にWV部を受け皿にして首都圏の若年・中年層の会員増を進めてきましたが、当会の会員数は退会者数とバランスする程度に留まっています。当会の維持発展のためには、若年・中年層入会者を3〜4倍にしていくなが必要があります。また、入会者が楽しく安全に登山を続けられるクラブを作っていく必要があります。

この2年はこれに注力していきますので、ご支援をお願いいたします。

神長幹雄(かみなが・みきお)

①9722

②常務理事

③110周年記念事業実行委員会、「山岳」、会報「山」、「JAN」各編集委員会、図書委員会、家族登山普及委員会

④オールラウンドに楽しんでいるが、特に残雪期の山スキー

高校時代に始めた旅の延長から山に興味を持つようになりました。大学ではほかの運動部に所属して

いましたが、就職先がたまたま山岳雑誌の編集部だったことから、山登りを継続できる環境になりました。夏山の縦走はもちろん、岩登り、沢登り、雪山、山スキーとオールラウンドな山登りの楽しさを体験できたことは幸運でした。また、辺境といわれる地に暮らす住民の生活にも興味があり、現在もグリーンランド、アラスカなど、辺境への山と旅に強く惹かれていきます。

JACの卓越した点は文化と伝統、つまり「人」にあると思います。一時期の中高年全盛期に比べ、若い世代へのそうした文化の継承、人を育てるという考え方がYOUTH CLUBで開花しつつあることは、とても喜ばしく、大切なことだと思います。

佐藤 守(やとう・まもる)

- ①13431
- ②常務理事
- ③総務委員会、国土地理院WG、ネパール大地震救援WG
- ④北海道、北アルプス、八ヶ岳など。夏冬を問わず道のない山を登っています。

初登山は20歳のとき、帆布のテ

ントに薪を担いで勇駒別温泉(現・旭岳温泉)から旭岳・黒岳を経て層雲峡への縦走でした。まだロープウェイはなく、雨の中、姿見ノ池の石室に到着するや夕食もとらず眠り込むという、山を知らない若者3人の無謀な行動でした。その後、日本山岳会会員の先輩に登山のイロハから教わり、恩返しのためYOUTH CLUBにスタッフとして参加してきました。昨年1年間の当会への新入会員数は過去最高の258名でしたが、高齢化に伴う退会者の増加などにより全体の会員数は微減となりました。運営経費を会費で賄っている当会にとって、会員数の減少は死活問題です。

会員の増強・財政再建などの課題解決に向けて力を尽くしますので、ご指導をお願いいたします。

勝山康雄(かつやま・やすお)

- ①8772
- ②理事
- ③資料映像委員会、集会委員会
- ④学生時代は北アルプスに偏ったエリアばかりでしたが、今は行き損ねた山にノンビリとカメラを持って……。

来年はマナスル登頂60周年になります。私が大学山岳部員のころは気象庁の近く、神田錦町の小さなビルにJACルームがありました。ちょうど1970年のエベレスト遠征のころで、帰国した登山隊の荷物片付けに各大学山岳部員が動員された記憶があります。登頂された植村さんや前日山協会長の神崎さんが、隊でも若手だったころです。学生部の委員から当時の青年懇談会、集会委員会と、皆様に遊んでいただきました。

気が付けば、会のワンダーフォーゲル部に参加のできない年齢になりましたが、まだ会の平均年齢以下ですから、高齢化した会員の皆様の安い参加費で四季折々の山にご案内する集会委員会で、アームチェアー・クライマーの皆様には絵画や映像をご紹介する資料映像委員会で、クラブライフを愉しんでいたらくお手伝いをさせてもらいます。マナスルのころの大先輩方からは「パブリック・サーバントたれ」と教育されましたから……。

中山茂樹(なかやま・しげき)

- ①11319
- ②理事
- ③YOUTH CLUB学生部、遭難対策委員会、海外委員会、10周年記念事業実行委員会担当理事、YOUTH CLUB委員、山岳研究所運営委員、図書委員
- ④日高山脈、頸城山塊、妙高山、笹ヶ峰、剣岳(おこがましいですが)。最近興味があるのは、夏登った沢を春に滑って降りること。

広く一般登山者向けに遭難対策に関する講演・講習を多く実施したいと考えています。

YOUTH CLUBの益々の発展にも役立ちたいし、学生たちと一緒に登れないまでも、「Playing Director」としてやっていければと願っています。

野口じゅみ(のぐち・じゅみ)

- ①12105
- ②理事
- ③医療委員会、科学委員会担当理事、YOUTH CLUB委員、110周年記念事業実行委員会委員
- ④夏は沢登り、冬は山スキーが主

です。ほかに雪山、バリエーション、ピークハント、地図にない道歩きなど、なんでも屋です。海外は2009年、三国学生交流登山隊に同行して玉珠峰に登頂、昨年はドロミテ山スキーツアーなど。

2003年からの2期を含めて、4期目の理事になりました。今期は110周年記念事業として、御嶽山と医療関係の3回のシンポジウムを主催、または主催予定です。また、別に会員のニーズにマッチした講演会などを企画しています。YOUTH CLUB、支部などの活動にも協力し、JACCの発展に貢献できればと思っています。今までの経験を活かして、努力したいと思います。よろしくお願ひいたします。

東京多摩支部会員。日本登山医学会理事、日本山岳文化学会常務理事。著書に『山の病気とケガ』（山と溪谷社）、『山登りトラブル回避&対処マニュアル』（大泉書店）など。

大槻利行(おおつき・としゆき)

①13019

②理事

③山岳研究所運営委員会、森づくり連絡協議会、高尾の森づくりの会

高校・大学時代の集団登山が、今日の自分をつくったと自覚しています。また、社会生活にも大いに活かされていると感じています。その点で、山とそこで出会った人々にとても感謝しています。110年という、人の一生より長きにわたり活動してきたJACCですが、「これからのJACC」は常に議論の中心であったと思いますし、試行錯誤されてきた貴重な積み重ねがあります。

YOUTH CLUBの若い仲間も増え、豊かな経験を持つ先輩会員とともに学び合うクラブの原点を大切にできるよう、微力ながら精進したいと考えています。一つの焚火を囲む沢登りパーティの和やかさをイメージしつつ、担当しています山岳研究所とJACCの益々の発展を目指したいと思っています。

どうぞ、よろしくお願ひいたします。

落合正治(おちあい・まさじ)

①13517

②理事

③YOUTH CLUB 学生部
④白峰三山の雄「北岳」

「若手育成を手伝う」はずでしたが、力量不足でアツという間の1期目でした。

今期はいくつかの目標を定め、未来ある学生たちに夢を吹き込み、彼らが「若き野武士」のごとく、パイオニア・フロンティアを念頭に独創登山を企画・立案・実行・反省へとサイクルを回す、元気者へと成長できるよう後方支援するとともに、入会を促して、卒業後もしっかりと山登りを継続し、実りある人生を楽しんでいただけるよう応援できればと思います。

来年ホスト役となる第10回日中韩学生交流登山も、企画に工夫を凝らし、草の根民間外交の重要性を各国の若者たちの間に共有認識を育めればと思います。

まずは山登りのクラブですから、理屈抜きで一緒に山登りを楽しみ、考え、行動することの実行でしようか。

山賀純一(やまが・じゅんいち)

①14660

②理事

③「山の日」事業委員会、家族登山普及委員会
④山梨県の山々、六甲山

制定に向けた運動の真っ只中に担当理事を引き受けた国民の祝日「山の日」は、いよいよ2016年8月11日に現実のものとなります。これを機に、全国の支部や各委員会、そして一人一人の会員の皆様が「山の日」を身近に感じ、山との関わりを一段と深めていただきたいと願っています。そのお手伝いが少しでもできるよう、担当理事として心新たに臨みたいと思います。

新たに家族登山の普及も担当することになりました。自分自身も山に魅せられたきっかけは、父に連れられた家族登山でした。子どもたちの山との出会いが幸せな経験になり、その後の人生に良い影響を与えられるよう、微力ながら取り組む所存です。

星 征雅(ほし・まさのり)

① 14837

② 理事

③ YOUTH CLUB青年部、
同WV部

溪流の写真に魅かれて山を始めました。東北大学ワンダーフォーゲル部の出身で、東北の沢とヤブが山登りの原点です。初めて行った大行沢(オオナメ沢)は、今でも一番好きな沢の一つです。就職で上京してからはバリエーションからは遠ざかっていましたが、4年前に青年部に入ってから山仲間がいつぱいに増え、また、岩稜・山スキーにも行き始め、世界が広がりました。

勤務先の山の会で、高齢化に応じて組織運営を見直し、新人を広く受け入れてきた経験を、YOUTH CLUBでの活動に役立てたいと考えています。

直江俊式(なおえ・しゅんすけ)

① 14775

② 理事

③ 公益法人運営委員会、YOUTH CLUB青年部

④ 年間を通して沢登り。ナメ主体の沢ならどこへでも。

引き続き公益法人運営委員会を担当するとともに、YOUTH CLUB委員会内の青年部を担当することになりました。

公益法人運営委員会は、本会の法人としての存立および本会のコンプライアンスを担っています。実務に精通した各委員のご尽力により、制度面は過去2年でかなり整備されましたが、積み残しの部分もまだあります。昨期に引き続き制度面の整備を進めます。

YOUTH CLUB委員会は発足以来、多額の予算をいただきましたが、なかでも多くの予算投下を受けたのが青年部です。その予算に見合う貢献を青年部が果たせるよう、道筋をつけたいと考えております。

谷内 剛(たにうち・こう)

① 14951

② 理事

③ 総務委員会、DM委員会、自然保護委員会

④ 北アルプス、房総の山など

両親がそれぞれ富山、石川県出身のため、帰省を兼ねて北アルプスと北陸の山を特に好んで登っています。ちなみに、現在勤務して

いる会社の本社は福井県にあるため、北陸三県に縁ができました。

これまで支部事務局長や家族登山普及委員会委員を務めるなかで多くの会員と関わる機会を得る一方、地方の抱える課題も知ることができました。また、担当している委員会ではプライベートな時間を割り、残業を切り上げて会の運営のために励む会員の姿にいつも敬服しています。

こうしたこれまでの経験や会員の会に対する思いを大切にしながら、日本山岳会の発展と会員のクラブライフがより一層充実するよう、微力ながらお手伝いをしたいと思っています。

平井拓雄(ひらい・たくお)

① 7292

② 監事

③ 事業(集会)委員会、財務委員会、監事(2010～13年)

④ 上高地を拠点とする山(特に六白山)、会津の山

40年ほど前から土曜会、三水会に参加し、多くの長老から薫陶を受けた。今後も充実したクラブライフを大切にしていきたい。

重廣恒夫(しげひろ・つねお)

① 7931

② 監事

③ 110周年記念事業実行委員会オプザーバー

1996(平成8)年の「日本百名山連続踏破」以降、テーマを決めた全国登山を継続しています。2003(平成15)年からは、江・若・丹(滋賀・福井・京都)国境縦走を皮切りに、中央分水嶺関西支部担当分、ラウンド琵琶湖(滋賀県境縦走)、四国分水嶺踏査、近畿分水嶺踏査などで1000kmほどを縦走し、今また「関西支部設立80周年記念」事業の一つで兵庫・岡山・兵庫・鳥取・兵庫・京都・奈良・大阪・京都・大阪・奈良・奈良・和歌山の県境を踏査する「関西支部県境縦走」の約800kmの縦走を続けています。創立100周年で編纂された『新日本山岳誌』掲載の山を登る「チャレンジ4000」生涯4000山登山」は、7月末でやっと1593山目。全国を巡る「安全啓発登山」を今後も続けていきたいと思っています。

平成27年度支部事業補助の報告

支部事業委員会委員長 宮崎紘一

支部事業委員会では、会の若返りと会員増加を促進することを目的として、支部に対しての事業補助制度の運営を昨年から始めました。全国にまたがる支部の状況は設立50年を超える歴史のある支部から新しく設立された支部、また支部員数が300名を超える巨大支部から30名に満たない小型支部まで様々な支部が存在しています。

これらの支部を一樣に語るのは無理がありますが、昨年度の支部ごとの新入会員数のデータで分類すると、入会会員が二桁のグループと入会者なしのグループ、そして中間の新入会員一桁グループがあります。会員母数に違いがあるのですが単純に比較できないのですが、会員獲得への姿勢はうかがえ、支部の活動状態を知ることができるデータだと思います。

事業補助募集に対しての反応も新入会員の多い支部が積極的であり、申請内容も事業補助目的に沿った確かな申請になっていて支部運営の様子が垣間見える興味深いものでした。申請書の審査にあた

っては内容と支部状況を勘案して討議し、内容や表現を訂正して再申請を依頼したものがありました。審査結果を理事会に推薦し、承認を受けて助成金を支給しました。

昨年度は広島支部・東京多摩支部・北海道支部・山陰支部の4支部に支部事業補助を行いました。それぞれ申請内容も趣旨を踏まえたもので、広島支部は若手登山者の育成を目的として地域の大学山岳部の活動を援助し支部若手リーダー育成につなげるという遠大な計画で、結果の出るのには時間のかかる事業です。長期展望を持って進めてほしいと思います。

東京多摩支部は地元自治体と共同で登山教室を運営し、受講終了後は支部運営の登山教室にステップアップして会員に推薦するという一貫方式で、すでに10名を超す新入会員獲得の実績を挙げています。両支部とも活発な活動を続けており、特に広島支部は助成申請の内容に経験深さが感じられ、支部ルームを自力で入手した秘訣の一端が感じられました。山陰支部

は「第1回『山の日』を語る米子集会」と題した講演事業企画ですが、第1回とあるとおり今後継続的に実行することによる支部活性化を進めての会員増強を目的としたものでした。直接的な会員増加企画ではありませんが、「会員獲得のない」グループの支部が一体となつての活動を通じ支部の活性化を促進し、会員増強や若手リーダーの育成への道筋と期待し推薦しました。北海道支部は50周年記念行事の一環として行なわれた「オホーツク圏地球環境生態系等調査」

ではのフィールドを活用した自然調査活動を通じての若手リーダー育成と会員増強を目的としたもので、結果を期待したいと思います。今後の補助事業は財政状態から今年度補助予算が減額されておりいつまで補助制度が続けられるかわからない状況ですが、できるだけ援助をしていきたいと考えています。本部の委員会ではYOUTH CLUB以外では会員獲得や若手育成など活性化機能が期待できない現状を考えると、支部の存在の重要性がますます大きくなり、支部交付金の今後を考えると、

ますます活発な支部活動が期待されると思います。

支部事業補助の活動内容と成果 東京多摩支部事務局 山本憲一

東京多摩支部では平成24年より立川市生涯学習推進センターとの共催で初心者登山教室を始めています。毎年募集する受講生は30名です。期間は3ヶ月間で、3回の座学と3回の登山実習、計6回の講座となっている。山の歩き方・マナー、装備、地図読み、山の気象、怪我と治療・トレーニング等を学び、登山実習として奥多摩三山(三頭山、大岳山、御前山)を登っている。この初心者登山教室修了生を対象に、さらなる登山技術・マナーの向上を目指して初級登山教室を立ち上げた。期間は7月から翌々年の3月まで、初心者登山教室の3ヶ月間と併せると2年間の登山教室となる。毎月1回、座学か登山実習を行ない、奥多摩、中央線沿線、上高地山研に宿泊しての山行などを行ない、3月の雲取山に登り修了となる。

初年度は第1期登山教室だけであったが、次年度からは第1期と

第2期の登山教室が並行して行なわれることになり、指導スタッフ体制に大きな問題が浮上してきた。

一つは講師・リーダー・サブリーダーの高齢化である。現状は超ベテランが教える初心者・初級登山教室となっており、若手サポート会員へのリーダー育成教育が急務となった。

また一つは、運営経費の赤字である。一般受講生を山に連れていく引率型登山であるため、リスクマネジメントとして多くのサポート人員を投入している。交通費・宿泊費の一部を補助する費用が受講料では賄えず、支部からの持ち出しとなっているが、ほとんどが無償のボランティアに近い状態となっている。

そういう背景があり、平成26年度に「初級登山教室運営及び次期教室リーダー育成プログラム」について申請を行ない、支部事業補助を受けた。

次期教室リーダー育成プログラムは、①引率型登山のリスク軽減を目的として行なっている下見活動をリーダー育成の場とする。②カリキュラムは講師がその時期、その場所に合わせてより具体的な

プログラムを作成する、とした。

登山教室の下見兼リーダー育成研修は、平成26年度に①9月15日高水三山、②11月1日大山、③2月15日陣馬山、④3月15日扇山の4回実施、延べ34名が参加した。現地を歩きながら①下見山行の要領(下見ポイント)、②多人数パーティーの歩き方、作り方、③歩行技術指導方法、④標高差体得とペース配分、⑤登山と疲労、疲れない歩き方、⑥休憩のとり方、水分・食事のとり方、⑦道迷いの注意点、⑧登高速度体感、⑨トランシーバーの使い方、⑩登山用具の種類、使い方等について講師の指導を受けた。

登山教室のリーダー・サブリーダーとして体得しておかなければならない知識・技術について現場での実践指導は多くの成果を上げることができた。しかしながら、下見山行を兼ねているため立ち止まっただけの指導は難しく、登山時間の関係もあり、下山後の反省会会場で行なう時間が多くなった。それも時間が限られ、多数の参加者に細かな指導をすることの難しさを感じた。その解決策として、全員が一堂に会して、受講生への指導

上の疑問点・不明点について話し合う機会を持つ必要があるとの結論に達し、追加育成プログラムとして1泊2日の合宿研修を行なうこととした。

合宿研修は2回行ない、延べ34人が参加した。リーダー・サブリーダーがテーマ別に担当を決め、登山教室での指導の考え方、教え方などの解説と問題点をプレゼンし、その後参加者全員で討議する形をとり、最終的に登山教室指導マニュアルにまとめる方向で進めた。参加者の中には、第1期登山教室修了生もあり、受講生の立場からの貴重な意見を聞くことも大変参考になった。さらに「登山リーダーの法的責任」、「携行医薬品の使用方法」、「ロープワークの復習」などもカリキュラムに入れ、登山教室を運営するにあたって起ってくる諸問題について対応できるよう議論を重ねた。

現在、この合宿研修で議論を重ねた結果を登山教室指導マニュアルとしてまとめる作業に入っている。次期リーダーへ引き継がれ、ブラッシュアップされてさらによいものになっていくであろう。

初心者・初級登山教室の受講料

も少しずつアップするよう努力しており、数年後には赤字とならない健全な形での運営が可能になるであろう。第1期初級登山教室は平成26年3月で修了したが、その修了生の中から10名が日本山岳会に入会した。第2期修了生からは平成27年3月修了と同時に3名が入会手続きを行ない、今後も数名の入会者が出る予定である。

初級登山教室は、多摩地域に自立した登山愛好者を育成する場であるとともに、次世代リーダー育成の場、日本山岳会への入会勧誘の場ともなっており、今や東京多摩支部の公益事業の柱となっている。今後「継続は力なり」をモットーに大事に運営していきたい。

支部事業補助の活動内容と成果

広島支部 渡辺勝俊

1・最低限の資金で最大の効果を

広島支部では、学生への技術支援を公益活動の一環として位置づけ、現在支部が実施している登山講座に学生をスタッフとして受け入れ、一緒に活動してゆくなかで山に登らない山岳部から一歩でも進むことができるのではないかと、

と考えたのが主たる発想である。

年間12回の講座と補講5回を含めて17回(1泊2日を中心)の活動をするにより、現在の状況を一つでも打ち破ることができるのではないかと。また、そのモチベーションを維持させるため、講師料という形で登山用具購入費を支援しようという方法である。いわば、支部活動に付加した形で低予算の支援活動を行ない、支部と大学山岳部との共存関係を築くこと、端的に言えば、最低限の資金で最大の効果を活かしたいということである。

2・学生の置かれた環境

現在の学生の置かれた環境は30〜40年前と大きくかけ離れている。まず、学業の保証という点から各授業への出席率が大幅に求められており、それに加えてレポートなどの課題も求められている。一方では、就職活動のシステム自体が変わっており、従来の学校推薦制から自由応募制へと大きく変化している。そのようななかで、学生自体のゆとりがなくなっているのが実態である。期末試験後の補講などにより、実質上の夏季休暇に

入るのは8月初旬となっている。また、経済的な問題からアルバイトに頼らざるを得ない状況にある。

一方で、上級生からの技術の継承が途絶え、自分たちがリーダー層になっても無理なく合宿を組むことが難しくなっており、その悪循環が繰り返されている。登山に求められる技術が身に付いていないことが事故につながる可能性がある。そのことによりまた、冬山や春山についての合宿が組めなくなっているのである。

3・成果

学生スタッフとして昨年度受け入れたのは4名である。すでに一昨年度では2名を受け入れており、6名を登山講座修了として認定している。これら人員は今年度の各大学のリーダー層になっている。多くを望めないなかで、昨年度の活動は読図に力を入れてきた。登山での地図読み山行、積雪期の読図を中心にしてきたが、少なくとも、磁石が今まで部の共同備品であったという状況からは少しずつ脱していようか。

なお、現在までの学生のJACCへの入会は3名、高齢化の著しい昨今、希望が持てるところである。

登山講座受講生との交流という点から言えば、人生の先輩と後輩が一つテントの中で過ごすことにより、世代間交流が芽生えるのではないかと思われる。ちなみに、昨年度の受講生は14名全員がJACCに入会した。

直接の成果ではないが、団体加盟しているこれら大学の部員数は70名近くになっており、マーケットという視点から考えると、これから学生に対してコミットしてゆくことにより、日本山岳会への活動に対して親しみを持つようになるものと思われる。実際にルームを訪れる学生は増えている。

4・今後の展望

このプロジェクトは人材育成であり、そのためにオールシーズンにわたり山に入った学生が増えることにより、ごく初歩的な環境が整うにすぎない。そのためには、少しでも多くの学生に山に触れる機会を与えることが望まれる。また、基本的な技術を習得できたことにより、文登研や本部の研修でさらに技術習得に励むことができるようになることが期待される。

個人的には半世紀前のように先鋭的な山岳部に復帰するのではな

く、あくまでも山岳をフィールドとするスポーツの一環として考えるべきであり、科学的な安全登山を一層推進する必要があるものと考えている。また、山岳フィールドとマラソンやウォーキングと融合した新しいスポーツとして考えることもできるのではないかと考えている。

時代は決して逆戻りできるものではなく、より新しい付加価値を加えた新しい山岳スポーツとして再構成できるのではないかと考えている。

ネパール救援募金を贈呈 ランタン村復興とロールワリンの山の学校再建に

本年4月25日に発生したネパール大地震とその余震により、ネパール・ヒマラヤの各地で被害が広がりました。特に「世界で最も美しい谷の一つ」と謳われたランタン地域は、村落全体の崩壊など深刻な状況にあります。日本のNGO「ランタンプラン」(代表・貞兼綾子氏)は、ランタン村再興に尽力されており、日本の主要山岳6団体(公益社団法人日本山岳会、公益社団法人日本山岳協会、公益社団法人日本山岳ガイド協会、日本勤労者山岳連盟、日本ヒマラヤン・アドベンチャー・トラスト、日本ヒマラヤ協会は、これを支援するため救援募金を贈呈することにいたしました。

また、多くの優秀なシェルパを輩出してきたロールワリン地域では、山の学校が損壊し、再建しなければならぬ状況です。そこで日本の主要山岳6団体は、現地のNGOと協力して、2つの学校を救援募金によって再建することにいたしました。

ネパール大地震救援募金贈



8月6日、本会ルームで「ランタンプラン」代表の貞兼綾子氏へ主要山岳6団体からの募金が贈呈された

7月31日現在、主要山岳6団体の募金の受け皿である日本山岳会の救援募金口座には1302万5351円(うち本会会員分606万6576円)が入金されており、ランタンとロールワリンには、まず1回目として各500万円を贈呈いたしました。

この救援募金の第1回の締切は10月末日です。ランタンおよびロールワリンは、まだまだ支援が必要です。どうか引き続き救援募金へのご協力をお願いいたします。両地域の復興状況については適宜報告いたします。

図書受入報告(2015年7月)

編著者	書名	ページ/サイズ	発行元	刊行年	寄贈/購入別
浮田典良・加賀美雅弘・藤塚吉浩	オーストリアの風景	188p/21cm	ナカニシヤ出版	2015	出版社寄贈
黒野こうき・西松賢一郎・竹中純瑜	「おおぐちにやってきた播隆さん」講演録	55p/30cm	大口町歴史民俗資料館	2015	ネットワーク播隆寄贈
布川欣一	明解日本登山史 : エピソードで読む日本人の登山(ヤマケイ新書)	270p/17cm	山と溪谷社	2015	出版社寄贈
大町山岳博物館(編)	山博にライチョウがやってくる! 山博「ライチョウの里」へ再出発	20p/30cm	大町山岳博物館	2015	発行者寄贈
日本山岳会 宮崎支部(編)	神々の山を辿る : 日本山岳会宮崎支部創立30周年記念誌	42p/30cm	日本山岳会宮崎支部	2015	発行者寄贈
K. ラウバー(著) B. 淑美 他(訳)	マッターホルン最前線 : ヘルンリ小屋の日々と山岳レスキュー	256p/22cm	東京新聞	2015	出版社寄贈
小清水定男	アパラチアン・トレイル紀行	72p/21cm	小清水定男(私家版)	2015	著者寄贈
城島紀夫	ワンダーフォーゲル活動のあゆみ : 学生登山の主役たち	212p/21cm	古今書院	2015	著者寄贈
神戸大学山岳会・山岳部(編)	山と人百年(山と人第19号上巻・神戸大学山岳部百年史)	352p/26cm	神戸大学山岳会・山岳部	2015	発行者寄贈
神戸大学山岳会・山岳部(編)	山と人百年(山と人第19号下巻・神戸大学山岳部百年史)	456p/26cm	神戸大学山岳会・山岳部	2015	発行者寄贈

「山の日に向けて」山を考える③

日本の山の美しさ その1

小泉武栄

世界的に見て美しい山々が連なる所としてまず挙げられるのは、ヨーロッパ・アルプスとカナディアン・ロッキーであろう。そこには氷河や氷河の削った巨大な岩壁があり、青い湖面の氷河湖を囲むように針葉樹林や草原が現れる。まさに壮大で美しい風景である。

こうした大きい風景は残念ながら日本にはない。日本は山国だが、世界的な視野から見ると、中山低山の連なる国にすぎない。日本アルプスの山々ですら、3000m前後に過ぎず、中部地方以外の地域では2000mを超える山ですら、少ない。したがって、数字で見る限り、日本の山は迫力に乏しいといわざるをえない。

しかしながら、山の魅力となると、数字で見るとは大違いで、上であげたアルプスなどに勝るとも劣らない優れた点がいくつも現れる。たとえば、日本列島には、規模は小さくとも槍・穂高連峰や剣岳のような鋭い岩峰があるし、一方には大雪山のような広大な高原

状の山がある。白馬岳や立山には大雪渓と氷河地形がよく残り、富士山をはじめ多数の火山にも恵まれる。また、南アルプスのように深い森に覆われた山があるかと思えば、飯豊山や鳥海山のように残雪に恵まれ、亜高山針葉樹林の代わりに偽高山帯の草原の広がる山もある。さらには会津駒ヶ岳や平ヶ岳のように山頂部に美しい湿原を擁する山もある。北岳や白馬岳や大雪山は、高山植物の多さとお花畑の広く分布することで知られ、橄欖岩という珍しい地質からなる夕張岳や早池峰山、至仏山などは固有種の多いことで著名である。

また、山には谷が付き物だが、深くえぐられた谷には、岩を削って清流が流れ、水と岩と森林は全国各地で見事な渓谷美を造る。そして、水はときに高い滝となつて落下する。いかにも箱庭的なこぢんまりした風景が多いが、これこそが日本の山の美しさといえよう。ここにあるのは、恐るべき山の個性と多様性である。ひとつとして同じものがない。雪と氷と岩壁に鎧われたヒマラヤの高峰もすごいとは思いますが、植物の乏しい風景は個性に乏しく、温かさを欠き、美しいというよりも、圧迫感を感じさせるようになる。

山が低いのに、日本ではなぜこんなに豊かで多様性に富む景色が生じたのだろうか。それは日本がユーラシア大陸の東に位置する島国だということに原因がある。温帯にある日本の山は四季の変化が明瞭で、夏は温度が高くなつて、植物の旺盛な生長が可能になる。しかし冬は著しい低温と、3000m級の山としては世界一の強風にさらされ、それに世界有数の多雪という条件が加わる。

日本アルプスなどの稜線部では、強風による吹きさらしと、風背側への雪の吹きだまりが生じ、雪と氷の世界となる。その結果、夏風衝地には草原や砂礫地ができ、風背側には残雪やお花畑ができる。日本人には当たり前のように見える多彩な山の風景だが、それなりの訳があつて生まれているのである。

「山の日」メモ

この夏、かなりの数のイベントが各地で催されたが「山の日」の周知度は依然として低迷している▽最近のある10000人調査で、国民の祝日「山の日」が来年から施行されることを知っている人は55%で、8月11日を知っていたのはその3分の1という結果が発表された。この数字をそのまま受け止めて、いまなぜ「山の日」なのか、周知の輪を広げ認識を深める1年にしたい。「山の日」をどのように実践したらよいのか―支部事業委員会と連携して、具体的な方策を探っているところだ▽ヤマケイ新書の20冊目として今月、『日本の山はすごい!』が発刊された。サブタイトルは『山の日』に考える豊かな国土で、編集・執筆はわが委員会の永田弘太郎さん。祝日制定運動に取り組んで日本の山がいかに興味深い存在で生活と文化に深くかわっているかを改めて思い知った、そのことを少しでも多くの人に知ってもらいたい、と書いている。出典一覧に、今号のシリーズを執筆した小泉武栄さんの『山の自然学』(岩波新書)がある。

N — 東 西 北 — — 南 南 北 — S

会員の皆様のご意見、エッセイ、俳句、短歌、詩などを掲載するページです。どしどしご投稿ください。(紙面に限りがありますので、1点につき1000字程度でお願いします)

日本山岳会選定 三百名山の登頂

矢野弓之介

現在、日本山岳会110周年記念事業の一つとして「日本三百名山登頂シリーズ」の山行企画が開始されているが、どういう訳か今まで「三百名山」の記事はほとんどなかったように思われ、今回投稿することにした。平成3年、中学時代からの山友の薦めにより日本山岳会に入会し、「三百名山」の完登を目指すことにした。現時点で会員のうち完登者が何人くらいいるかは分からないが、先輩の南川会員の標高2000m以上の全山登山などに比べれば「それがどうした」程度のものである。

「深田百名山」の中で日本アルプスには2500mを超える高山は30山あまりがあるが、山小屋、避

難小屋などもあり、縦走に日数は要するが、それほど困難さはない。むしろ難峰は登山口までのアプローチが長く、行程の長い北海道のトムラウシ山、幌尻岳などではないかと思う。

「深田二百名山」となると、やはり北海道のカムイエクウチカウシ山、ペタリ岳、長野・静岡県境の池口岳、山梨・静岡県境の筑ヶ岳、また、登山道が分かりにくく、積雪期でないと登りにくい石川・岐阜県境の笈ヶ岳などがある。

しかし、難峰として記憶に残る山は、30年ほど前に雨中の登降に12時間あまりを要した北海道のペタリ岳だ。リベンジのため昨年9月の78歳誕生日の前日に登降し、60年の山歴で最長連続歩行時間となる16時間を要した。

「三百名山」では難峰はなくなるが、積雪期でないと登れない山として尾瀬の景鶴山、岐阜・福井県

境の野伏ヶ岳があるが、いずれもスキー登山が可能である。

現役時代は長期休暇の取得は難しく、「深田百名山」を完登したのは定年退職後の平成7年ごろであった。「三百名山」を完登したのは平成25年8月の、北海道の活火山で登山規制のある渡島駒ヶ岳の剣ヶ峰である。昭和28年から60年あまりを要したことになる。単独行は128山、会社の山友と120山、昔の山岳会の山友と32山、日本山岳会の山友と12山、その他8山となっている。なお、ツアー登山は一切利用していない。

登山という行為は所詮遊びの一つである。しかし、自然を相手にするため、天候異変、アクシデントなどのリスクを伴う危険なスポーツであり、その行為はあくまでも自己責任に基づくものである。

登山の心得は、①コースを間違えたと思われる場合は元に戻る。②ツエルト、アルミシートを持参する。③非常食を持参し、水500mlを残しておく。④疲労が極度に至らぬうちに避難小屋などに退避するかビバークする。

今後は好きな山を気ままに登っていきたい。

INFORMATION

創立110周年記念事業

海外トレッキングシリーズ

ブータン・ヒマラヤ・トレッキング



▲ガンカープンスム(7570m)の南東壁を仰ぎ見る。1940年代に世界中から4隊が挑戦したが、すべて失敗に終わり、現在は世界最高の未踏峰となっている

未踏の世界最高峰を間近に！ガンカープンスム大展望トレッキング14日間

地球上に残された人類未踏の世界最高峰ガンカープンスム(7570m)。この山は、ブータン北部と中国の国境にある、ブータンの最高峰です。今回、記念事業として、圧倒的な迫力でガンカープンスム南東壁を望むことができる(写真)ベース・キャンプまでトレッキングします。

このコースに足を踏み入れた偵察隊やトレッカーはごく少なく、未踏の最高峰の懐深くに入り込む絶好の機会です。

期間 10月31日(土)～11月13日(金)

参加費用 72万2000円

発着地 東京、大阪、名古屋、福岡

最少催行人数 10人

問合せ 〒105-0003 東京都港区西新橋2-8-11 第7

東洋海事ビル4階 アルパ

インツアーサービス(株)

TEL 03-3503-1911

info@alpine-tour.com

グレート・ヒマラヤ・トレイル踏

破計画実施の延期について

4月25日に発生した、ネパール大地震の影響がヒマラヤ山中奥深くを東西に結ぶ、グレート・ヒマラヤ・トレイル(GHT)にどの程度影響を及ぼしているか、まだ解明されておられません。そこで残念ながらGHT踏破の実施は延期いたします。したがって、ハイライト・コースのトレッキング・ツアーもGHT踏破に付随する計画のため、こちらも実施を延期いたします。なお、人気トレッキング・コース(エベレスト街道、アンナプルナ方面など)については徐々に復旧し、外国人トレッカーの入山は制限されていません。

日本三百名山登頂シリーズ⑤

九州の日本三百名山5座登頂

雲仙普賢岳・多良岳・脊振山・由布岳・鶴見岳を歩く3日間

参加者募集！

「日本三百名山登頂シリーズ」という創立110周年記念事業の山行企画第5回のご案内です。今回は九州北部の日本三百名山5座を一気に登ろうという欲張りプランです。JACC会員以外の方も参加できますので、山仲間やご家族などお誘い合わせの上、奮ってご参加ください。

本ツアーには日本山岳ガイド協会のガイド資格を有するツアーリーダー2名と、インタープリター(解説員)として当該山域に精通しているJACC支部会員(第5回の場合は福岡支部)が、また、サポートとして本部集会所委員会スタッフがそれぞれ1名同行します。

【第5回日程・行程など】

期間 10月3日(土)～5日(月)

集合解散 長崎空港 10時30分集合、大分空港 17時30分解散

行程 1日目／長崎空港⇌仁田峠

―妙見岳―雲仙普賢岳―仁田峠

⇌雲仙温泉 2日目／⇌金泉寺

登山口―多良岳―金泉寺登山口

⇌脊振山駐車場―脊振山―脊振

山駐車場⇌湯布院温泉 3日目

／⇌中央登山口―由布岳―中央

登山口⇌別府高原⇌鶴見山上―

鶴見岳―鶴見山上⇌別府高原⇌

大分空港

宿泊 1泊目／雲仙温泉「休暇村

雲仙」2泊目／湯布院温泉

「由布院ことばき花の庄」(予定)

食事 朝2回、昼2回、夕2回付

参加費 7万2000円

定員 20名(最少催行人数15名)

申込み・問合せ 〒105-0003

03 東京都港区西新橋2-8-11

第7東洋海事ビル4階 アル

パインツアーサービス(株)

TEL 03-3503-0223

FAX 03-3508-2529

日本三百名山登頂シリーズ係まで

担当 〆椋山(すぎやま)

✉ kokunai@alpine-tour.com

*お申込みの方に詳細なご案内を

お送りします。

(創立110周年記念事業実行委

員会／集会所委員会)

活動報告

日本山岳会の
各委員会、同好会の
活動報告です。

集友委員会

バルト3国最高峰と 国立公園トレッキング

バルトというと、2013年に引退した、大相撲大関の把瑠都関を思い出す方が多いのではないかと思います。把瑠都関は3国の中では一番北にあるエストニアの出身である。3国はバルト海の東岸に南北に並ぶ3つの国を指し、北から順に、エストニア、ラトビア、リトアニアである。北は海を隔てフィンランドと西はポーランド、東はロシアと接している。歴史的には第2次世界大戦後はソ連に併合され、1991年にソ連崩壊のあと独立し、現在はEUの加盟国である。

今回の旅の目的は、3国の最高峰(最高点)を目指すことと、各国の国立公園のトレッキングを楽しむことにある。リトアニア最高峰

のオークトヤス(292m)は車道から500mほど歩いた小高い丘にある。頂上には標識と木組みの展望檣があり、この国の最高点であることを示している。周りには農家があり、北海道の富良野のあたりのような、穏やかな景色だった。一方、ラトビアの最高峰、ガイジンカルンス(312m)はスキ場脇の階段を50mほど上った所であり、特に標識などはなかった。この辺り一帯が同じくらいの高さだという説明だった。眼下にはきれいな湖が広がっており、新緑がみずみずしい。エストニアのムナマギ(316m)には30mくらいの灯台のような展望塔が立っており、そこからの景色は360度で、周りの深い森、点在する湖沼などが展望でき、3つの中で一番最高所らしい雰囲気であった。三ヶ所とも登るのは簡単だったが、いずれも主要道路からかなり離れた場所

にあり、行き着くまではかなり時間を要した。バルトの3つの最高点に來た日本人で、我々は何人目だろう、などと言いながら7名(女性6名)で登頂? を喜び合った。

トレッキングは5ヶ所の国立公園で行なった。いずれも時間の関係で短い距離(5km~10km)しか歩けなかったが、各コースともとても新鮮に感じた。森の中のコースはいずれも良く手入れされており、とても歩きやすく、道標もきちんと設置されている。昔、何かの歌にあったが、(森と泉に囲まれ

た)中を歩いているような感じであった。木々の葉っぱは短い夏を謳歌するように思いつ切り濃い緑で彩られ、そこから出るオゾンは例えようもないくらい清々しかった。ラトビアのキュメリ国立公園は北緯57度(稚内は北緯45度)の高緯度にある湿地帯で、尾瀬のように木道が敷いてある。標高が低いにもかかわらず、トレイルの脇には高い所では咲かないワタスゲが咲いていた。この公園の近くに裸足で歩く2・5kmのトレイルがある。石ころ、砂利、木々の小枝、松ぼっくり、砂の道、泥水の中、浅い川の中、ビー玉、丸いガ

ラスなどがコース内に所々敷き詰めてあり、ここを歩きながら皆で痛い、キヤーイタタ、もうダメ、気持ちいい! などとワイワイ言いながら、痛くて気持ち良い経験をした。歩いた後しばらくは足の裏がほてっていた。

車窓から見た3国の風景は森を抜けると緩やかな起伏の農地が続き、所々広い菜の花の畑が広がり、また、反対側にはタンポポの群落が広がるというようなのが、この季節の代表的な景色で、真つ青な空の色とも調和し、本当に素晴らしい。身も心も爽やかになる。

山ではないが、ラトビアの首都リガ、エストニアの首都タリンの旧市街は世界遺産にも登録されている重厚な石造りの町で、教会、大聖堂、市庁舎など見るべき建物が多い。物価もとても安く北欧などと比べると半分くらいなので、対岸のヘルシンキ(約80km)から買い物に來る人も多いとのことである。自然の美しさとともにぜひ、一度は訪れてみる価値があるバルト3国だった。

(山下秀一)

支部

だより

全国各地の支部から、
それぞれの活動状況を、
北から南へとレポート
します。

越後支部

平成27年度越後支部総会
と黒森山親睦登山

5月23日(土)に越後支部総会が、福島県喜多方市山都町の「いいで荘」を会場にして開催された。飯豊連峰福島県側登山基地として名高い山都町、新緑が眩い小高い丘にある景勝地である。支部総会出席者47名と委任状124名で総会議決数171名(支部会員83%)である。

14:00から橋本正巳支部長の挨拶で始まり、「5年ぶりに会津地区での総会となり、地元の佐竹さん始め関係者の方々の協力に感謝したい。」と会場設定に当たられた会津の皆さんにお礼が述べられた。引き続き橋本支部長の議事進行で議題審議に入り、平成26年度の活動報告・会計報告、平成27年度の活動方針と予算説明があり、若干

の質疑を経て承認された。特に今回は支部役員改選の年に当たり、役員候補者案が提示され、互選の結果新支部長に遠藤家之進正和氏が選出された。その他の役員として、副支部長に桐生恒治氏(新任)と佐藤レイ子氏(新任)、事務局長に後藤正弘(新任)、事業委員長に小山一夫氏(再任)、広報委員長に本間一人氏(再任)、図書委員長に高辻謙輔氏(新任)、自然保護委員長に吉田理一氏(新任)、県山協委員長に多田政雄氏(新任)、総務委員長に後藤正弘(新任)という顔ぶれで、今後の支部運営を託すことになり拍手をもって承認された。また、今年度は越後支部70周年にあたり、記念行事として『日本三百名山』越後支部執筆担当21座登頂を計画していることを、山崎幸和プロジェクト・リーダーより提案された。さらに、全国支部懇談会を平成28年4月9・10日に岩室温

泉を会場にして、弥彦山登山を行うことが遠藤家之進正和とプロジェクト・リーダーから発表された。大きな行事が2つあり、成功に向けて会員の全面的な協力が要請された。

総会終了後16:00から記念講演となり、地元の森沢堅次氏(公員)から「会津の山と辻」と題したお話をいただいた。辻まことは詩人・画家であり、山岳、スキーなどをテーマとした画文や文明批評的なイラストで知られているが、会津の山との関わりを講師の山歴を交えてユーモアたっぷりに話され、辻まことの数奇な生涯と魅力に興味津々に聞き入った。

その後席を移して懇親会となり、最も遠方の支部会員で神奈川県平塚市から参加していただいた東原進会員の乾杯の音頭で開宴、越後岳人の交流サロンとして旧交を温め、地酒を飲みながらの山談義に花を咲かせることができた。

24日(日)は晴天に恵まれ、絶好の登山日和であった。各自の車で宿舎を出発し「いいでの湯」で車を集約して乗り合わせ、8時30分に出発した。登山参加者は48名で、登山口まで狭い林道を20分ほどで到

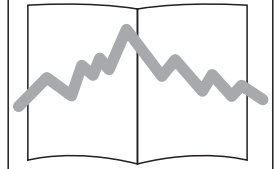
着した。佐竹信幸コースリーダーの現地説明の後8時50分出発。新緑の森をギンランやエビネなどの山野草に励まされて登り、10時に黒森山(917m)に到着した。樹林の隙間から残雪豊かな飯豊連峰とりわけ大日岳が立派に聳え、印象的だった。写真を撮る人、スケッチを描く人など思い思いに楽しみ、10時40分下山開始。往路を戻り登山口11時50分着、無事解散となった。

(後藤正弘)

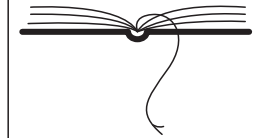
寄付金及び助成金などの受入報告

平成27年6月まで

寄付者など	金額	寄付の目的、その他
赤羽孝一郎 会員	20万円	永年会員からのご寄付
姫野和記 会員	2万円	永年会員からのご寄付
大澤宣彦 会員	3万円	永年会員からのご寄付
田村英也 会員	1万円	永年会員からのご寄付
中川智康 会員	10万円	永年会員からのご寄付
アサヒビール株式会社	10万円	高尾の森づくりの会へ助成
富士電機株式会社	5万円	高尾の森づくりの会への助成
電源開発株式会社	10万円	高尾の森づくりの会への助成
株式会社伊藤ハム	5万円	高尾の森づくりの会への助成
株式会社エリオニクス	10万円	高尾の森づくりの会への助成
公益財団法人 KDDI 財団	70万円	高尾の森づくりの会 ドローン植栽地生育状況監視活動助成
コニカミノルタ株式会社	20万円	高尾の森づくりの会へ助成



図書紹介



金 邦夫 著

すぐそこにある
遭難事故
—奥多摩山岳救助隊員からの
警鐘—



2015年5月
東京新聞刊
四六判 264頁
1400円+税

奥多摩は秩父多摩甲斐国立公園の東端を形成する山岳地域で、多摩川水系が浸食した深い渓谷が特徴で山も峻険である。標高2017mの盟主「雲取山」を頂く山域は「都民の水源」として森林の自然美が守られてきた。東京都の水源地と渓谷の美しさを求めて多くの登山者で賑わう奥多摩は、都心から手軽に行ける東京の奥座敷として知られる。一方、奥多摩は全国有数の山岳遭難事故の多発地域であることはあまり知られていない。

警察庁でまとめている全国山岳遭

難データの都道府県別遭難件数では長野県、富山県、岐阜県などの山岳県に並んで東京都の遭難件数は常に上位に位置しており、毎年山岳事故は100件ほど、死者・行方不明者は10人弱となっている。

私も近年、三頭山山頂に着いた途端倒れた登山者に救命活動を行なっている東京都レンジャーに遭遇した。下山時に救助に駆けつける警察、消防の何組もの救助隊とすれ違った。こんなに多くの人が一つの事故に関わっているのかと驚いた。また、私の所属する同好会の恒例行事である高尾山清掃登山時に、行方不明者の軀を発見したこともある。

著者は赴任先の奥多摩（警視庁青梅警察署山岳救助隊）で遭難事故の多さに驚き、安易に登ろうとする登山者に警鐘を鳴らす目的で2冊の本『奥多摩登山考』（2000

2年）、『金副隊長の山岳救助隊日誌』（2007年）を出版し、その続編として本書を出版したと書いている。

著者が2013年3月31日に退官した後、東京新聞刊の山岳月刊誌『岳人』に連載した20編と奥多摩山岳救助隊日誌抄掲載の9編、奥多摩観光協会発行の地域誌などに掲載されたエッセーをまとめたものである。40件ほどの遭難事例と救助隊の活動内容が詳細にまとめられており、遭難原因を検証し、予防策を提唱する構成となっている。道迷い遭難、奥多摩に行つてくると出たままの行方不明者、同じ場所20年間に7件も起きている転落事故、トラン中の転落事故、パティー分裂による遭難、山賊事故、読図ミスによる滑落事故、凍った登山道の落ち葉でスリップし崖を転落、初心者の多いはぐれ遭難など、どこで事故が起きるか、どんな形で起きているかが網羅されているといつてよい。

遭難事例の紹介と同時に、山岳救助隊の活動内容が書かれている。事故の一報から救助隊の編成、現場への急行、事故者の発見、ヘリの救助要請、ホバーリング現場ま

での搬送などが詳細である。

本書のサブタイトルは「奥多摩山岳救助隊員からの警鐘」である。ここには、著者が奥多摩の安全登山に取組んできた20年間にわたる山岳救助隊員としての矜持と、現役の山岳救助隊員への応援エールが込められている。(山本憲二)

北海道大学山の会編

寒冷の系譜 北大山岳部 九十周年記念海外遠征史



2015年5月
北海道大学山の会
B5判 401頁
DVD・映像で見る海外遠征史3巻付き
頒布価格 5000円

北大山岳部は2016年に創部90周年を迎えるという。その記念事業として、海外遠征史を刊行した。

1962年にチャムラン峰(7319m)を初登頂して以降の海外遠征と学術調査隊の成立の背景や実績について当時の報告書から再編集し、関係者が回想を書き、座談会で反芻し、再評価している。

チャムラン峰以降の50年間で、北大山の会が母体となった遠征隊

は17隊、その他有志が参加した遠征を加えると50隊以上、2000人を超える隊員が海外の山々へ登攀と学術調査に出かけたという。毎年1隊以上が世界の隅々まで足跡を残しているという驚くべきエネルギーと探究心だ。総合大学として、地質鉱物、植物学、雪氷学、氷河研究、地球物理学などと登山の連携は創部以来のお家芸であり、JACの第1次マナスル隊から学術調査隊員が参加しており、第1次南極観測隊には、樺太犬を育て、犬橇による踏査を企てた隊員たちの参加に始まり、その後も北大山岳部関係者の南極観測での活動が続いている。

「外地の山々」の初登頂に始まって「地図の空白部」ともいわれた道なき広い原野と森林を跋涉し、雪深い北海道の山々の登頂を繰り返してきた北大のパイオニア精神は、必然の結果として1980年、バルンツェ峰の冬期初登頂、次いで1982年にダウラギリI峰の冬期初登頂に導かれたという(通史「寒冷の系譜」)。このあたりは「証言―その時代―」で今や老境に達した当事者による座談会で淡々と、あるいは熱っぽく語られている。

本書のタイトル「寒冷の系譜」は、いとも象徴的で文学的な響きではないか？ 自由闊達に語られる座談会や本書のために新たに書かれた回想は、冒険心を掻き立て、緊迫感があり、ライヴな読み物として楽しめる。多くの伝統校記念誌よりも大らかな自由さが感じられるのは私だけだろうか。

創刊号を編んだ伊藤秀五郎は詩人として、文章家としても知られている。北大の人たちは、部外者でも読んで楽しめる部報づくりの伝統を受継いでいる。

『五十周年記念誌』(1978年刊)は、創部当時の懐古的な文章が多く掲載され、坂本直行の挿絵が飾られた文芸的な雰囲気が出たが、本書は、海外遠征に特化した堂々400頁で、記録的なモノ

クロ写真と地図が載せられているだけで、「色気」に乏しい。それを補って、DVD3巻が付いている(解説書付き)。本書を読み進みながら、歴史的な遠征や登攀のシーンの映像を見ることが、臨場感が高まる。古いフィルムや画像の処理、音声の編集も見事なでき栄えだ。また、巻末に「資料」として海外遠征年表が載せられていて、戦前編は1926年、北千島アライ

ト山初登頂に始まって、南千島、アリューシャン列島、樺太、台湾、朝鮮などへ頻繁に出かけている。戦後編の華々しい遠征と併せて北大の海外登山の系譜が読み取れる。これからの10年、北大はいかなる海外遠征を展開するのだろうか？ (松澤節夫)

会

務

報

告

平成27年度第4回(7月度)理事会

議事録

日時 平成27年7月8日(水)19時00

分 21時25分

場所 集会室

【出席者】小林会長、吉川・大久

保・山田各副会長、神長・

佐藤各常務理事、勝山・中山・野口・大槻・落合・山賀・直江・星・谷内各理事、平井・重廣各監事(野口理事は所用のため審議事項1は欠席)

【オブザーバー】柏「山」編集人

【審議事項】

1・評議員の選任について

以下の会員が新任評議員として答申され審議した。(賛成14名、反対なしで承認)

西村政晃(7468)・黒川恵(7547)・高原三平(7949)・坂井広志(8798)・野沢誠司(9863)・高野剛(10144)・石川一樹(11022)・佐野忠則(12887)

2・秩父宮記念山岳賞審査委員の選任について

秩父宮記念山岳賞審査委員の選任について、別添資料により審議した。(賛成15名、反対なしで承認)

3・海外登山助成金審査委員会委員の選任について

海外登山助成金審査委員会委員の選任について別添資料により審議した。(賛成15名、反対なしで承認)

4・組織改正について

会員増強・財政基盤検討プロジェクトチームと収益事業・会員サービス検討プロジェクトチームを統合し日本山岳会再生委員会を設置、599ミュージアム・プロジェクトチームの設置、ネパール大地震救援ワーキンググループの設置などの組織改正について、別添資料により審議した。(賛成15名、反対なしで承認)

5・資料の貸し出しに関する規程の一部改正について

理事会決議を要した事項の一部を業務執行理事の権限に委ねることについて、別添資料により審議した。(賛成15名、反対なしで承認)

6・旅費規程の一部改正について

理事会決議を要した事項の一部を業務執行理事の権限に委ねることについて、別添資料により審議し、表現を修正した上で承認した。(賛成15名、反対なしで承認)

7・理事職務権限規程の一部改正について

旅費規程の改正に伴い、これに関連する理事職務権限規程の一部改正について別添資料により審議した。(賛成15名、反対なしで承認)

8・平成27年度支部への運営交付金の交付

金・事業助成金及び新入会員報奨金の交付

平成27年度支部への運営交付金及び新入会員報奨金の交付について、別添資料により審議した。(賛成15名、反対なしで承認)

9・平成27年度上期海外登山助成金審査

海外登山助成申請があり別添資料により審議し、同志社大学山岳部、神戸大学山岳会・山岳部、日本大学山岳部の3隊の海外遠征に対し計45万円助成することとした。(賛成15名、反対なしで承認)

10・監査法人との財務に関しての指導・助言業務契約について

前年度に引き続き太陽ASG監査法人に対し年間120万円で業務を委託することについて、別添資料により審議した。(賛成15名、反対なしで承認)

11・入会希望者承認について

14名の入会について、別添資料により審議した。(賛成15名、反対なしで承認)

【協議事項】

1・今後の会議日程について(佐藤)

今後の理事会、支部合同会議の開催日程について、別添資料により

協議し確認した。

2・マナスル60周年への日本山岳会としての対応について(佐藤)

今後の検討課題とすることとした。

【報告事項】

1・平成27年度通常総会における出席者数及び議案への投票数について報告があった。(佐藤)

2・関西支部重廣恒夫支部長の退任と後任支部長が選出されるまで金井良碩副支部長が支部長を代行することについて報告があった。(佐藤)

(佐藤)

3・理事の委員会、プロジェクトチーム、ワーキンググループの担当について報告があった(小林)

4・「黒部峡谷探検 吉沢庄作と冠松次郎」展の協力名義申請を承認したことについて報告があった。(神長)

5・樺平ビクターセンターにおける冠松次郎関連資料の展示延長申請を承認したことについて報告があった。(神長)

6・Tokyo Metropolitan Mountain MTGの後援名義申請を承認したことについて報告があった。(佐藤)

7・日本山岳会の業務に要する旅

費等の支給方法等について、財務委員会で検討するとの報告があった。(吉川)

8・6月における寄付金及び助成金の受入状況について報告があった。(吉川)

9・ネパール大地震救援の募金額(7月4日現在約1060万円)について報告があった。(佐藤)

10・ネパール大地震救援募金の配分方法等に関する山岳6団体の打合せ状況について報告があった。(佐藤)

(佐藤)

11・平成27年1月の北アルプス遭難事故後の捜索から発見に至るまでの経緯等について報告があった。(中山)

(中山)

12・会報「山」柏編集人の理事会へのオブザーバー出席について報告があった。(佐藤)

13・会報「山」7月号の発行について報告があった。(柏)

【連絡事項】

1・「弾丸登山自粛」及び「富士山保全協力金」に係る周知依頼(山梨県・静岡県)

2・富士山測候所開所の遅れ(NPO法人富士山測候所を活用する会)

3・神戸大学山岳部創部百周年記念式典(神戸大学山岳部) 8月1日(土) 神戸市

【今後の予定】

1・第58回高頭祭 7月25日(土) 弥彦山

ルーム目誌 7月

1日 集委員会
2日 総務委員会 YOUTH CLUB
3日 総務委員会
4日 新入会員オリエンテーション
6日 総務委員会
7日 自然保護委員会 総務委員会 図書委員会 九五会
8日 理事会 山想倶楽部
9日 フォトビデオクラブ 山岳地理クラブ
10日 YOUTH CLUB
13日 資料映像委員会 スキークラブ
14日 山岳研究所運営委員会 スケッチクラブ
15日 青年部 三水会 つくも会
16日 科学委員会 家族登山普及委員会 緑爽会 休山会
17日 山の自然学研究会

21日 00会 スケッチクラブ スキークラブ

22日 自然保護委員会 麗山会

23日 みちのり山の会

24日 学生部 山遊会

27日 公益法人運営委員会 フォトビデオクラブ

28日 支部事業委員会 YOUTH CLUB

30日 デジタルメディア委員会 三百名山プロジェクト

31日 遭難対策委員会

資料映像委員会 「山の日」事業委員会

7月来室者510名

会員異動(7月分)

物故

井口拓夫(5093) 15・7・21

速水又吉(11414) 15・1・28

中川和夫(14905) 15・7・4

退会

上智大学山岳部(5236)

平井和雄(7575)

荻窪山百合の会(9866)

清野誠一(9991) 宮城

高寺紀子(10781)

米山孝志(13654) 越後

越谷山岳部(15575)

I N F
O R M

インフォメーション

A T I
O N

◆登山で役立つファーストエイド講習会

遭難対策委員会
登山やハイキングで携行している救急用品や登山用具、これらを利用して効果的な応急手当の方法について学びます。どなたでもご参加いただけます。

日時 9月29日(火)19時～21時
場所 日本山岳会 104号室
講師 恵秀彦会員(遭難対策委員会)

持ち物 普段ご自身が山に持つていく救急バッグ

参加費 無料

申込み 遭難対策委員会 川瀬恵

☒ jac.sountaisaku@gmail.com

◆「会津・博士山と小野岳」

集会委員会

錦秋に彩られた大スラブを愛で、ブナ林の黄葉の中を歩きます。登

山口へアクセスしづらい山々にチャーターバスで行きましょう。宿泊は、源泉かけ流し循環なしの会津柳津温泉です。

日程 10月17日(土)～18日(日) 1泊2日

集合 17日 午前7時15分 JR新宿駅

解散 18日 午後7時頃 JR新宿駅

行程 17日 新宿～小野岳～柳津温泉18日 博士山～新宿

費用 2万8000円(交通費、宿泊、懇親会、保険料、雑費)

申込み 9月20日迄に 植木淑美宛

☎ 042-734-114

98、または

☒ syukai@jac.or.jp

*申込者に詳細をお送りします。傷害保険加入のため、生年月日をお知らせください。

◆白神山地・ブナ林再生事業と自然観察会 青森支部

世界遺産・白神山地のバッファゾーン周辺の生育不良杉林地をブナ林に再生するための除伐や植樹などの作業、および原生ブナ林の観察会を行なう。寝袋、食料必携。テントはこちらで用意可。

日程 9月26日(土)～27日(日)

集合 26日8時JR弘前駅城東口 および12時30分奥赤石林道ゲート

解散 27日15時奥赤石林道ゲート、20時弘前駅送迎可

経費 なし(食料、保険は各自持ち)

定員 30名

申込み ハガキ、FAX(017-2447237)、

メールにて須々田秀美宛

(〒036-0103 平川市本町北柳田96-2

☒ h.susuta@gmail.com)

9月19日までに

◆ネパール大地震救援募金

チャリティー山岳映画会

山岳映画サロンでは、ネパール大地震の復興の一助としてネパール・ヒマラヤでのトレッキング作品の数々を上映するチャリティー

映画会を開催します。入場料全額＋寄付金は日本山岳会指定口座を通してネパールへ贈ります。

日時 9月30日(水)

第1部・13時30分～16時30分

第2部・18時～21時

会場 豊島公会堂 定員802名

入場料 1000円(第1部2部別料金)

主催 山岳映画サロン

TEL 03-3994-2632

◆市立大町山岳博物館 企画展「山岳風景画の世界」

当館を含めた大町市が収蔵する美術資料のうち、明治以降の画家(大下藤次郎・吉田 博・茨木猪之吉・中村清太郎・足立源一郎・山川勇一郎・畦地梅太郎・藤江幾太郎・牧潤二)が描いた山岳風景画16点を展示します。併せて山岳画家が愛用した登山道具も展示(足立の地形図、軽登山靴、キスリングや中村のニッカーズボン、山川のピッケルなど)。

会場 市立大町山岳博物館・特別展示室

会期 7月18日(土)～10月12日(祝)

開館 9時～17時

観覧料 大人400円

高校生300円
小・中学生200円
問合せ 〒398-0000長野
県大町市大町8056-1
市立大町山岳博物館

担当・関
TEL 0261-2210211
FAX 0261-22112133
saupaku@city.omachi.nagano.jp

晩餐会における写真展 作品募集のお知らせ

12月5日(土)京王プラザホテルにて晩餐会が開催されます。今年はJAC創立110周年記念にあたり、総務委員会と協議の上、通常展示しているアルパインフォトビデオクラブの作品以外に、希望があれば各支部会員の写真も同時に展示することになりました。展示会場の都合で募集作品は10・15点までとします。ご希望の支部は左記募集要項を順守のうえ、お申込み下さい。

- ① 出展作品は他作品とのサイズバランス調整上、可能な限り全紙プリント・マットパネル仕上げとする。既存の作品も可。
- ② 応募作品は10月31日必着。
- ③ 送付先はJACアルパインフォトビデオクラブ(〒102-0008 1東京都千代田区四番町5-4

日本山岳会事務所)宛。

④ 作品は往復送付に耐え得る梱包とし、配送料は出展支部が負担し払込み手続き完了のこと。

⑤ 応募作品の展示は全体をまとめてアルパインフォトビデオクラブで行ないますが、撤収作業に関しては支部参加作品の返送用梱包材料の用意および返送作業はできませんので、出展者または出展支部の担当者にてお願いします。

なお、晩餐会当日の写真展示時間は13時～17時の約4時間です。以上の要項を熟読のうえ、ご参加をお願いします。

問合せ アルパインフォトビデオ

クラブ代表・川嶋新太郎

TEL 03-3873-0907

または

TEL 090-9369-2345

お詫びと訂正

2015年7月号(842)にて、左記の誤りがありました。

●13ページ

総会第3号議案「平成27・28年度役員(理事・監事)選任の件」について、理事候補者の一覧表がNo.6で途切れた形で掲載されてしまいました。

理事候補者の一覧表につきまして、先にお届けしました総会資料に掲載の内容と同一ですので、こちらでご確認ください。

(ホームページの「事業報告／平成27年度通常総会／平成27・28年度役員」からも確認できます)

●14ページ

記事執筆者名に誤りがありました。

(誤)野口いずみ

(正)野口いづみ

●19ページ

「Climbing & Medicine・69」の内容が、2015年4月号16ページ掲載の「同・67」と同一内容でした。

会員ならびに関係者の皆様にご迷惑をおかけしましたことをお詫びして、訂正いたします。

◆編集後記◆

●7月31日から4日間、薬師岳・五色ヶ原を縦走してきた。北陸新幹線開通の影響か、例年より登山者の数が多いように感じた。(自分を含め)相変わらず中高年登山者の姿が目についたが、若い女性登山者、いわゆる山ガールも目立った。しかも単独、テント泊が多かった。日本の山ボーイたちは、どこへ行ってしまったのだろうか。

●先月もある新聞の取材を受けたが、「山のグレーディング」が今注目されている。近年の山岳遭難の傾向として、登山者の実力と山選のミスマッチが大きな要因となっているケースが多いという。正に「敵を知り、己を知らば……」である。いつのころからだろうか、日本人が謙虚さを失ってしまったのは。

(節田重彰)

日本山岳会会報 山 843号

2015年(平成27年)8月20日発行
発行所 公益社団法人日本山岳会
〒102-0081
東京都千代田区四番町5-4
サンビューハイツ四番町
TEL 東京(03)3261-4433
FAX 東京(03)3261-4441
発行者 日本山岳会会長 小林政志
編集人 柏 澄子
Eメール:jac-kaiho@jac.or.jp
印刷 株式会社 双陽社